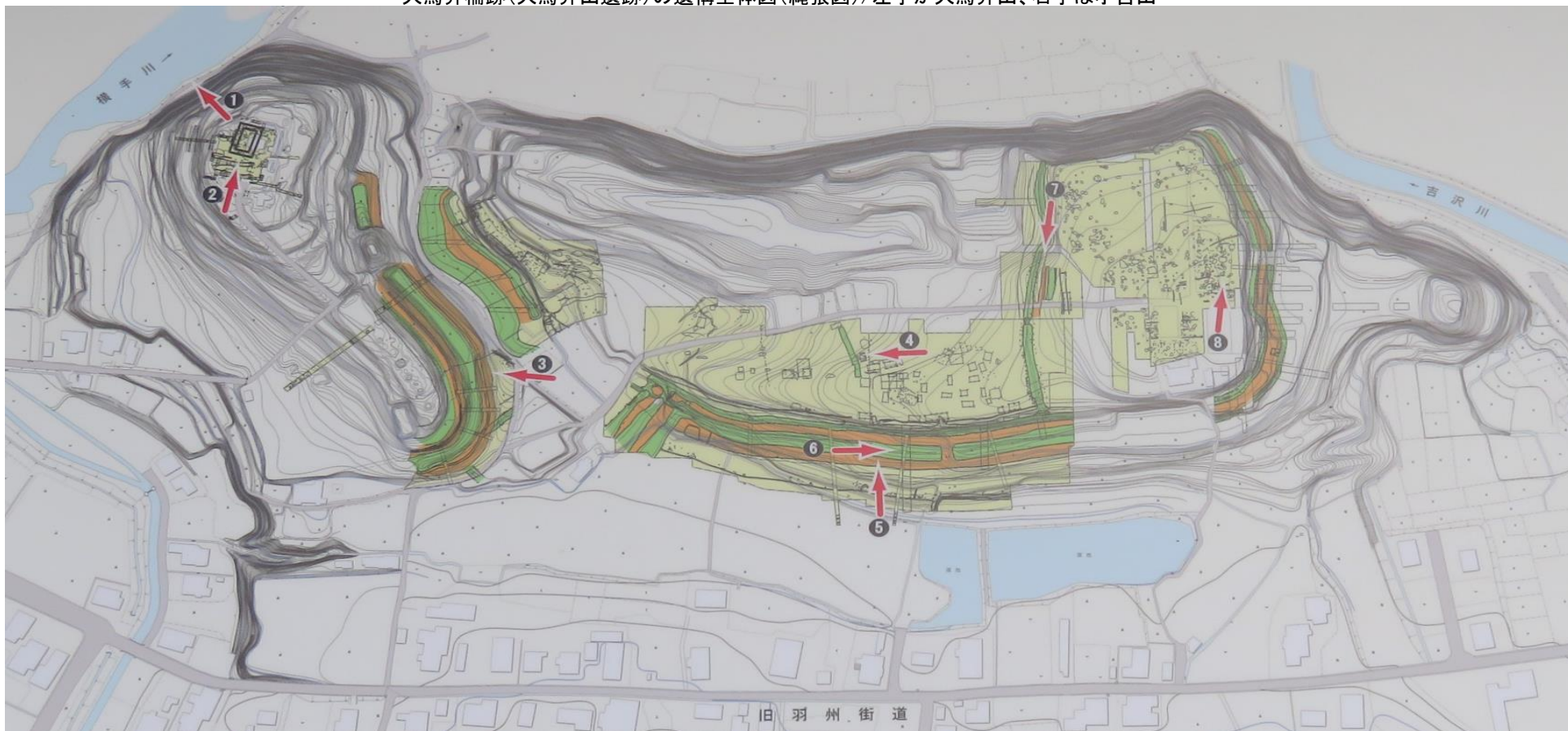


# 大鳥井柵跡(秋田県横手市)

大鳥井柵跡(大鳥井山遺跡)の遺構全体図(縄張図)/左手が大鳥井山、右手は小吉山





ここが大鳥井柵跡/さまざまな説明板が立っている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





# おおとりやま 大鳥山のあらまし

この地域は標高約七〇メートルの独立丘陵で、かつては大鳥井山と呼ばれていた。丘陵の南側と西側に横手川、東側を杉沢川が流れ、北西側で合流している。

こうした環境は狩猟採集時代の居住地として、また武力抗争の時代には戦略拠点として利用されてきた。

ここからは、旧石器時代（一万数千年前）の動物解体用の石器や、縄文時代中期から後期（三千五百年前ころ）の住居、食糧を貯蔵した穴、土器や石器も発掘されている。

その後、稲作が伝わり人びとは平野部に移り住んだが、平安時代の後期には地方豪族の居城として再び利用された。

大鳥井柵は、平安時代、清原光頼・頼遠（大鳥居太郎）の父子によって、この地に築かれたと伝えられる。当時、清原一族は、前九年の役（一〇五一〜六二年）により、奥羽一帯を支配していた。

一族の内紛に端を発した後三年の役（一〇八三〜八七年）は、横手盆地一帯に戦火がひろがり、この大鳥井柵も横手市の北部にある金沢柵とともに焼失し、源義家と清衡の連合軍に敗れた一族は滅亡した。

やがて藤原清衡の三男・正衡によって再び城柵が築かれ、関根柵と呼ばれた。

台地を二重に巡る土塁や、空堀、建物跡、使用された土器、火災の跡などが当時を物語っている。

近世になり、石棺を埋めた積石墓や十三塚といった宗教や信仰にかかわる造営も行われている。

十三塚は一辺約四メートルの方形の塚を中心に、となりあうように円形の塚がならんでいる。

平成五年三月

横手市教育委員会  
横手市文化財保護協会

説明板/陸奥国に於いてエミシ(蝦夷)の末裔であった地元豪族の安倍氏は、前九年の役で大和政権側の源頼義・義家親子によって、厨川(厨川柵)にて滅ぼされてしまったが、もう一方のエミシの末裔で出羽国の地元豪族であった清原氏は、その陸奥国をも手中に入れて勢力を拡大した/大鳥井柵跡や周辺の金沢柵跡なども清原氏の守りの「城」であった





大鳥井柵跡の遺構/建物跡・柵列跡・柱穴跡・堀跡・大溝跡・土塁跡が見て取れる







「市指定史跡 大鳥井山十三塚 入口」と記された標柱が立つ

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





「11世紀の堀と土塁」へと進むと説明板が立っている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





説明板/一口で「城柵」と言っても、多賀城跡・伊治城跡・胆沢城跡・志波城跡・徳丹城跡・秋田城跡・弘田柵跡などのような大和政権側の行政機関（言わば政庁などの役所）としての機能ではなく、大鳥井柵跡は地元豪族の戦いのための「城」としての機能を果たした

## ⑦ 大鳥井山遺跡 大鳥井山東部

大鳥井山東部は遺跡の南側に位置します。この場所は、土壘と堀が現在でも明瞭に残っており、往時の居館の姿を体感することができます。ここでは大鳥井山神社の参道が尾根に達する付近の堀切状の地形より東側の様子について説明します。

大鳥井山の尾根からは南北両側に斜面が延びますが、北側は大鳥井山と小吉山の間の沢目（現在は埋め立てられて園路になっている）に及び、南側は明永川（江戸時代初期までの横手川の流路）の手前で麓に達します。

昭和54年及び平成19・20年に発掘調査が実施されています。調査面積は約2,000㎡です。調査の結果、土壘跡と堀跡のほか、大溝跡や柵列跡などが検出されました。

北側斜面には、11世紀当時の二重の土壘と堀が目視できる形で残っています。このうち北側（下段）の土壘跡と堀跡は、その盛り上がりやくぼみをはっきりと観察することができます。土壘跡の幅は8.35m・高さは最大で1.6mで、堀跡の幅は11.6m（基底部で3.8m）・深さは1.6mで、底面は平らです。調査の結果、斜面を削って堀を作り、その排土を下方に盛り上げて土壘としたことがわかりました。

南側（上段）の土壘跡と堀跡はほぼ埋没していますが、尾根の直下の段状の地形として確認することができます。発掘調査で確認したところ、土壘跡の幅は5.8m・高さが1.1m、堀跡が幅3.8m、深さ0.7mでした。土壘の土は北側と同様に堀の排土を盛り上げて構築さ

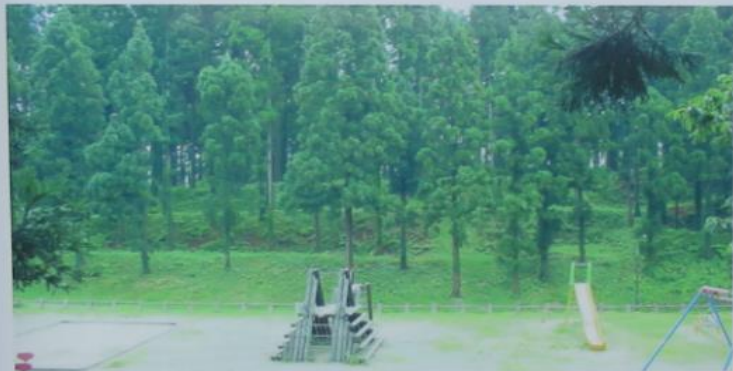
れていましたが、土を少しづつ盛り上げて固める作業を繰り返していたことがわかっています。

現在確実に土壘跡・堀跡と確認されているのは北側の裾野を取り巻いている上述の部分だけですが、実は大鳥井山の南側の山裾にも段状の地形が観察できます。二重の堀と土壘は、横手川に面した西側斜面を除き、大鳥井山をぐるりと取り巻いていた可能性が高いと考えられています。

なお、北側斜面の土壘跡及び堀跡の下から大溝跡が検出されており、土壘等の構築以前から人々の活動があったことがわかっています。

尾根部分は幅が狭く、頂上部の幅は約10m程度です。北東端には十三塚が築造されていますが、鎌倉時代以降のものと考えられており、市の文化財に指定されています。現在目で見ることはできるのは9基ですが、発掘調査ではもう1基の基礎構築の跡が確認されています。

このほか、小吉山西部で見られた礎石塚も含め、遺跡全域で塚状の遺構が確認されています。この遺跡は、前九年合戦・後三年合戦が終了した11世紀末頃には居館としての機能が失われ、霊場のような信仰の場に変化したようです。このことで、遺跡は後世の開発を免れ、11世紀の居館の形態をとどめることができたのではないかと考えられます。



目に見える形で残る二重の堀と土壘



外側の堀



見上げた様子



内側の堀と柱穴



外側の堀と土壘



見下ろした様子（手前から堀・土壘・堀・土壘）

大鳥井山東部の、二重の堀と土塁が見て取れる



目に見える形で残る二重の堀と土塁



先に進むと、二重の堀と土塁が廻っている





左上を見ると、大鳥井山十三塚についての説明板が立っている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





# 十三塚

(大島町三二一―二)

造営の年代は明らかでないが、一辺四メートルの方形を呈する塚を中心に、ほぼ隣合うように円形の塚が並ぶ貴重な遺跡で、市指定文化財になっている。

十三塚は室町時代むろまちから近世きんせいにかけて造られたと考えられ、集落の境界線上とか、丘陵上りゅうじょうに並べられる塚で、宗教に係るかどうかは判らないとされている。

振り返って見たところ





更に進む





この辺りが発掘された北側斜面の土塁周辺か



**3** 大鳥井山北側斜面の土塁周辺  
(昭和 54 年)



その先、前方の上に大鳥井山神社があるようだ





左手を見ると堀切のようになっている





これはまさしく堀切/大規模な堀と土塁、堀切や畝状の堅堀といった、いわゆる15世紀以降の戦国期に発展したと考えられていた「縄張」が、11世紀(平安時代後半)に、この東北地方に存在しているということは特筆されることと云う [\(クリックしてビデオを見る\)](#)





さて、ここは南側斜面下からのアプローチ部/案内板が立っていた





ここから大鳥井山神社へ進もう





そこを進むと鳥居がある





その先へ進むと、左手に石碑が立っていた





これは「大鳥山頼遠居館址」と記された(清原)頼遠碑





更にその先へ進むと、先程の堀切の所に出る/ここにも案内板が立っていた





左に進むようだ



順路案内



大鳥井山神社  
(大鳥井山西部地区)



11世紀の堀と土塁  
(大鳥井山東部地区)



十三塚



- A 大鳥井山西部説明板
- B 大鳥井山東部説明板
- C 小吉山西部説明板
- F 順路案内板



これは堀切をアップで見たところ





振り返って鳥居方向を見たところ





さて、左手に折れて大鳥井山神社へ進む





途中、右手を見ると段差(階段状地形)になっている





更に登っていく





右手を見ると、ここにも階段状地形がある

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





ここが大鳥井山神社(主郭跡)で、建物跡が検出されているようだ





説明板がある





説明板/後に、奥州藤原氏の祖となる藤原清衡(清原清衡)は、人生色々あって、育ての恩人である清原氏をこの近くの金沢柵跡で滅亡に追い込むこととなる

## ② 大鳥井山遺跡 大鳥井山西部

大鳥井山西部は遺跡の南西側に位置します。大鳥井山の頂上部とその周囲の斜面からなり、頂上部には約400m<sup>2</sup>の平坦な場所が存在して、現在は大鳥井山神社の境内となっています。標高は80mで、遺跡内では最も高い場所であり、麓との標高差は約20mです。この頂上部の北東方向には尾根が延びており、南側から斜面を登ってきた参道がこれにぶつかって西に折れ、これに沿って登っていきます。その途中に3段の階段状の地形がみられますが、これは人為的に築かれた三重の土塁と堀の跡である可能性があります。

頂上部から南西に目を向けると、横手川の本流が直下まで迫ります。西側全体が非常に急な崖になっていますが、幅の狭い平場が数箇所に分けられています。北側に目を向けると、大鳥井山東部地区から延びる二重の土塁跡・堀跡が眼下に見え、その向こう側に小吉山西部地区が広がります。

この地区では平成20年に発掘調査が実施されました。頂上部では、古代的なつくりの掘立柱建物跡2棟、大溝跡2条や柵跡などを検出しました。調査以前は戦国時代(15世紀後半～16世紀)前後の城館跡ではないかとの指摘もあった大鳥井山ですが、調査の結果、前九年合戦・後三年合戦の時代を含む11世紀代(平安時代後半)にもっとも盛んに人間の活動がみられ、これ以降は江戸時代(17～19世紀後半)に入るまでほとんど利用されていなかったことがわかりました。このほか、北側斜面の二重の土塁跡と堀跡も調査され、

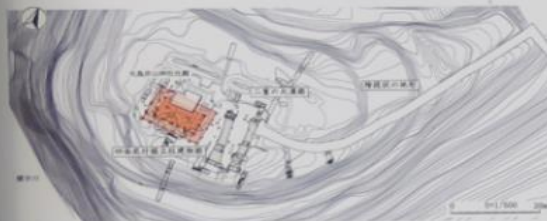
埋没していた内側の堀跡の様子などが明らかになりました。

頂上部で検出された掘立柱建物跡のうちの1棟は、現在まで大鳥井山遺跡で検出された建物跡の中で最も大きいもので、四面に庇が取り付いていたことがわかっています。庇を除いた部分(身舎)では梁行が2間(3本の柱で梁を支える構造)、桁行が5間(6本の柱で桁を支える構造)で、長さはそれぞれ5.2m・9.9mです。庇を含めると、梁行は9.1m、桁行は13.7m、床面積は124.67m<sup>2</sup>に及びます。

この建物は、その構造や周辺からの出土遺物などから、11世紀前半頃に建てられたと考えられ、建て替えはされていないこともわかりました。このような大規模かつ格式の高い構造を持つ建物は、秋田県内では類例がほとんどなく、奥州藤原氏が政治をとり行った場所とされる柳之御所遺跡(岩手県平泉町)など、地域の有力者の拠点でしか確認されていません。

当時この建物は、西側の麓から見上げると、急峻な崖の上に存在する非常に荘厳な施設として映ったことでしょう。

また、この建物の東側(神社の前面)からは、南北に走る2条の大溝跡(幅2.3m前後、深さ0.6m前後)が検出されています。この大溝は掘立柱建物を外部から区画していた可能性もあることから、この場所は遺跡内でも特に重要な場所であったと考えられます。



大鳥井山山頂部の遺構配置図



北西から見た大鳥井山(中央)・小吉山(左)・横手川(手前)



四面庇付掘立柱建物跡(立っている人の前に庇の柱穴が並んでいる)



掘立柱建物の想像復原図



掘立柱建物跡と盛土跡(手前の黒っぽい部分)



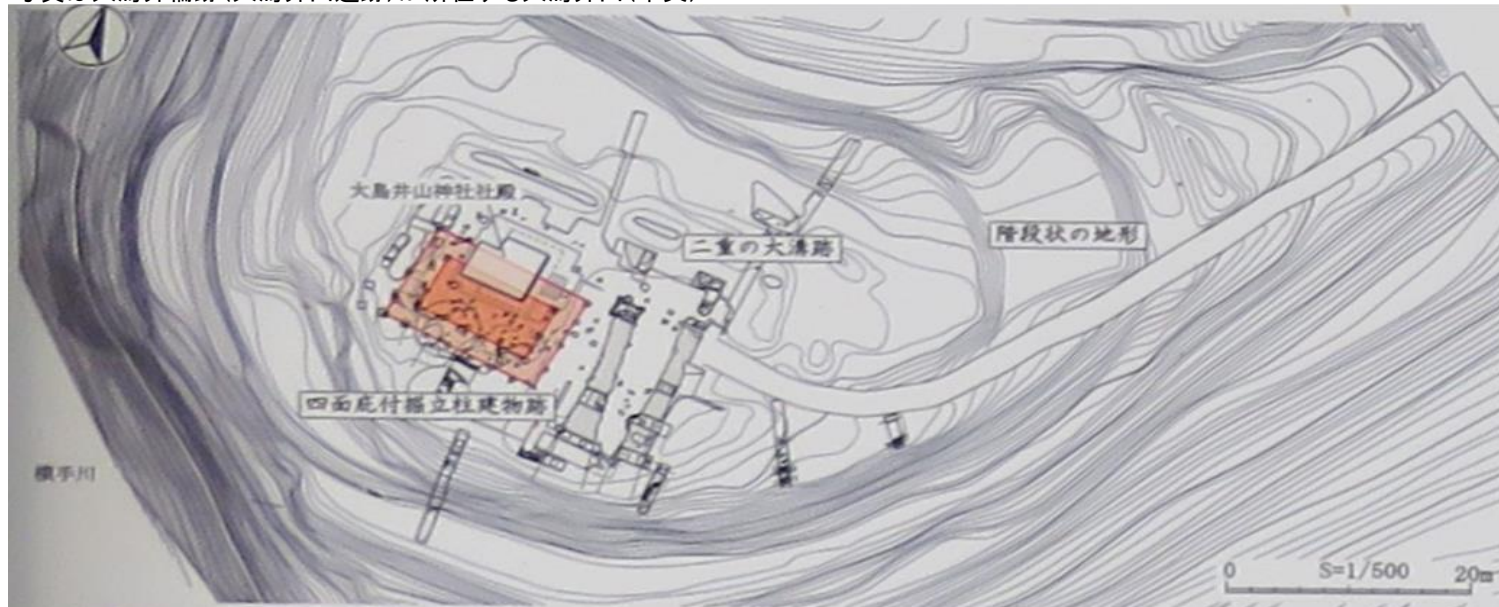
掘立柱建物跡(左)と大溝跡(右)



二重の大溝跡



四面庇付掘立柱建物跡の手前に、二重の大溝跡が検出されている(上図)/先程の段差は「階段状の地形」として記されている/下の写真は  
大鳥井柵跡(大鳥井山遺跡)が所在する大鳥井山(中央)



大鳥井山山頂部の遺構配置図



北西から見た大鳥井山(中央)・小吉山(左)・横手川(手前)



四面庇付掘立柱建物跡



四面庇付掘立柱建物跡（立っている人の前に庇の柱穴が並んでいる）





おおとりい やまじんじや  
**大鳥井山神社**  
(陸成字大鳥井山三六番地)

祭神は月夜見大神。つきよみのおおかみ 延宝七年(一六七九)

の建立で、旧社殿は小野寺時代の平城の  
城門の一部を用いて建立したものと伝え  
られ、極めて貴重なものであったが昭和  
三十一年に焼失、翌年再建した。

社殿内には万治元年(一六五八)家士  
遠藤三郎兵衛秀満とへだてひであつが彫刻奉納した勢至菩  
薩石像さつが安置されている。

横手市教育委員会



そこから見える鳥海山

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





前九年の役～後三年の役の登場人物の相関関係



後三年合戦金沢資料館冊子「後三年合戦と横手の歴史」より



後三年の役直前の清原氏の勢力範囲



後三年合戦金沢資料館冊子「後三年合戦と横手の歴史」より



さて、ここは近くの後三年合戦金沢資料館/周辺が陣館遺跡を含む金沢柵跡のエリア

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)





中に入ってみよう





俘囚(ふしゅう)と呼ばれたエミシの末裔で、出羽国の豪族であった清原氏が、ここ金沢柵で源義家率いる大和政権との後三年の役で滅亡する





陣館遺跡の説明板

# くに して い し せ き じん だ て い せ き 国指定史跡 陣館遺跡 (正式名称 大鳥井山遺跡附陣館遺跡)



後三年合戦(1083～1087)は、陸奥・出羽両国(現在の岩手・秋田県)の大部分を治めていた清原氏の内紛に、陸奥国の国守として赴任してきた源義家が介入し、清原氏が敵と味方に分かれて戦った中世武士の世の幕開けとなる日本史上重要な合戦といわれています。金沢櫓で源義家と敵対した清原氏は滅亡しますが、義家方に組した清原氏は生き延びます。その代表的な人物が平泉の中尊寺金色堂などを作った藤原(清原)清衡です。

金沢櫓は、200年以上も前から探索されてきましたが、はっきりとした櫓の所在場所については不明でした。横手市教育

委員会では、清原氏関連遺跡として平成22年2月に国指定史跡となった大鳥井山遺跡と立地や地形などが似ている陣館遺跡(図1)の発掘調査を行いました。

調査の結果、北東尾根平坦部からは、大鳥井山遺跡と同じような国司の館や寺院などに見られる四面庇垂立柱建物跡(写真②・③)が検出されました。この建物は、桁行7間(14.1m)、梁行5間(9.9m)の面積約140㎡の大きな建物で、羽州街道から見ると斜面の段状地形に囲まれるように建てています。さらに、この建物に向かって、補修を繰り返しながら長い期間使用された参道と考えられる道路跡も確認されました。建物

と段状地形、参道の関係は、中尊寺金色堂の周辺状況と類似しています。

また、陣館遺跡の南東斜面部の段状地形からは後三年合戦前後のものと思われるロクロ土師器(かわらけ)と内耳鉄鍋(写真⑤)が金沢地区で初めて出土しました。当時、鉄鍋は最先端の道具であり、権力者しか持つことが出来ませんでした。藤原清衡の館と見られる国史跡柳之御所遺跡の堀跡からも同様のものが出土しており、地鎮のために埋められた可能性があります。

以上のことが国の文化審議会によって評価され、陣館遺跡は清原氏関連遺跡として平成29年10月13日に国史跡大鳥井山遺跡附陣館遺跡として追加指定されました。



平成29年度 横手市元氣の出る地域づくり事業  
横手市文化財保護協会連絡協議会  
横手市教育委員会文化財保護課



上空からの写真/金沢資料館は左手/このエリア全域が金沢柵を構成していたようだ



④金沢柵推定地の立地（南から撮影）



陣館遺跡の遺構配置図





清原氏の大鳥井柵は金沢柵の直ぐ近くに所在する(右下)/前九年の役での安倍氏の滅亡を経て、出羽国・陸奥国の豪族にのしあがった清原氏ではあったが、滅亡に追い込まれる/その相手の大和政権側に奥州藤原氏の祖である清原清衡(藤原清衡)がいた/清衡の父は大和政権側の藤原北家の血を引く藤原経清だが、母は滅亡させられた安倍氏の娘であった/父、経清は前九年の役で安倍氏に与し、大和政権+清原氏に殺害された/その後、幼少の清衡は母とともに清原氏のもとで育てられた/そんな清衡が清原氏を滅亡に追い込み、その後、奥州藤原氏の基礎を築く(イヤー、人生色々あるよね！)



凡例 ● 後三年合戦関連 ● 史跡名所  
歴史・文化の里づくりをすすめる会 (平成23年度 横手地域づくり協議会補助事業)



左下が金沢資料館/金沢公園となっているエリアが金沢柵の中心部であったようだ/金沢資料館の背後が陣館遺跡





## 参考ホームページ

<https://www.city.yokote.lg.jp/bunkazai/page100503.html>

<https://blog.goo.ne.jp/pea2005/e/c290d25f442d2bd22d51aa5f727aa926>

<https://ameblo.jp/napo-jou/entry-12544153206.html>

<https://blog.goo.ne.jp/iunko-f2/e/bafc97ed3bcf3dd9a3abf2a5cfe5405f>

<http://kahoo0516.blog.fc2.com/blog-entry-660.html>

<http://www.komainu.org/akita/yokotesi/ootoriivama/ootoriivama.html>

<http://yogokun.my.coocan.jp/akita/yokotesi.htm>

<https://sites.google.com/a/onodenkan.net/lie-dao-cheng-zhi-ji-xing/niu-tian-xianno-cheng-ji/da-niao-ying-shan-yi-ji>



